

今日迄も存続する状態であつて、彼等も等しく此風習をもつて居る、元史憲宗本紀に、「乃祭天于日月山」。「七年秋駐蹕于軍腦兒醜馬乳祭天」。と記し、また有名なる當時の旅行家マルコ・ポーロも「彼等の宗教を見ると天を最高の神なりとして日々薰物を焚いて之を祀る」といふて居る、天を祀ることはこんな風であるが、更にまた地をまつることも見えて居る、同じくポーロによるに「天はたゞ心身の健在の爲めに之を祀りその子孫家畜收穫等の幸福をいのるが爲めには土地の神即ちナチゲーを祀る」と記して居る、即ち人間の禍福吉凶皆天地等のものに意志があつて、之に支配せらるゝものと思ふからして、之に依頼し、之を祀りて災害を逃れて幸福を得ようとする、そうして之等天地を祭るにも直ちに天を拜し地を拜することもあつた様ではあるが、別に羊皮を以て人間の形をした偶像を作りて天地になぞらへ之を禮拜するのである、萬象の間に人間と同じ様な精神作用を認めるばかりではない、その形をも人間にアッシミレートするのである、かゝることは自己のみを知つて他を解することの出来ない（もとより哲學的の意味に於て自己を知るの謂にあらず）蠻民には決して珍らしいことではない、諸民族の間に認むることの出来る極めて普通のことではあるが、また彼等の這般の觀念を知ることが出来るのであらうと思ふ、牛馬乳の増殖を計る爲めには更に羊皮で乳房の形を拵らえて之を祭る、日を祭る、月を祭る、石木に至る迄祭つたことがしるされてある、即ち彼等に對して禍を爲し福を與へ、乃至少しでも不思議と思ふものは皆之を祭り之を敬して之によりて自己の幸福を増進しよふとしたのである、そうしてかゝる考のよりて來る處は、もとより之等物象に靈妙なる活力があつて、人間の運命を支配し、その喜怒哀樂によりて色々の現象が起るからと考へたからに外ならない。かゝる考からして到底吾々には解釋することの出来ない奇々妙々の風習が起つて來て居る、今その二三を拾つて見るな